

朝日歌壇



〈日曜日のプローチ 19〉 junaida

長谷川 權選

九ちやんの忌や山の端に出でし月
(東京都世田谷区) 野上 卓
泣き方を忘れし祖母や敗戦忌
(始良市) 井之川健児
忘れるに十分遠し敗戦忌
(伊勢原市) 合志伊和雄
向日葵が我に語れと立ち並ぶ
(守谷市) 久保田洋二
あらためて闇の深さや大花火
(蒲都市) 秋川 一水
一死より試合再開夕立晴
(静岡市) 松村 史基
原爆忌帽子丸めて黙禱す
(甲斐市) 持原ひろ美
長崎の鐘は呻きぞ原爆忌
(長崎市) 下道 信雄
炎天の奈落の底へ草刈機
(長崎県波佐見町) 川辺 酸模
手を振って宇宙の駅に帰省かな
(東京都新宿区) 各務 雅憲

【評】一席。上を向いて、涙がこぼれないように。八月十二日、「日航忌」。二席。涙もかれ果てて。それも悲しい。三席。八十年とは。されどの意を含む一句。十句目。昨年十一月十三日死去した谷川俊太郎さんを思う。そろそろ着くころか。

大串 章選

世界に二つ広島忌長崎忌
(京都市) 室 達朗
炎天を透析に通ふいのちあり
(川口市) 渡辺 栄治
縄文の少年も見し夏銀河
(相模原市) 井上 裕実
黙禱の無心になれず敗戦日
(松阪市) 石井 治
原爆忌五歳のあとを生かされて
(アメリカ) 大竹幾久子
空蟬はあの日を思っている
(東京都府中市) 古川 泰
蟬の音を聴きわけてゐる齡かな
(藤沢市) 岡田 迪子
人想ふとき風鈴の遠く鳴り
(伊勢原市) 合志伊和雄
大花火使ひ切つたる闇淋し
(長野市) 縣 展子
草むしる隣家の庭は芝刈機
(深谷市) 野村 秀遊

【評】第1句。日本は世界で唯一の戦争被爆国。広島忌は8月6日、長崎忌は8月9日。核兵器廃絶を心より願う。第2句。人工透析を受けるため病院に通う。命あればこそその人生。第3句。縄文時代の少年も斯うして夏の銀河を見ていたのだ。

高山れおな選

「みてみて」のころのさまよふ夕焼空
(久留米市) 塚本 恭子
病院に死者の出口や蟬の穴
(大村市) 小谷 一夫
アテネにはギリシャ語で鳴く蟬の声
(紀の川市) 中島 紀生
打水に足を濡らして老いゆくか
(さいたま市) 齋藤 正美
灯蛾殺め我は俳句の虫と化す
(栃木県壬生町) あらゐひとし
カシオペア最後の発車梅雨の駅
(川崎市) かとうゆうき
青葉風恐竜の歯の化石かな
(加古川市) 森木 史子
図書館の絵本だいに半スポン
(福島県塩田町) 安部みさ子
マウンドへ伝令走る終戦日
(日野市) たま 走哉
北京の地敗戦の日の母十五
(東京都府中市) 宇野 京子

【評】塚本さん。過去からの声。幼い自分の？ 幼い子供たちの？ 小谷さん。寓意性を帯びた蟬穴。阿波野青畝に「ふたたびは帰らず深き蟬の穴」。中島さん。プラトンの対話篇には蟬が鳴くシーンあり。何語で鳴いているのかは知らないが。

小林 貴子選

源流は天の川とも黄河ゆく
(高松市) 信里由美子
揺れざるにすは津波とぞ炎天下
(東和山市) 板坂 壽一
チョコパフェに抜けたしてゐる夏期講座
(国東市) 木村 弘治
企業にも栄枯盛衰青嵐
(川崎市) 上山 暢子
歯切れよき西瓜に似たる女かな
(仙台市) 八島あけみ
静かなる炎天餓死の地へ続く
(取手市) うらのなつめ
先頭の蟻一番目の蟻その他
(佐倉市) 葛西 茂美
待つてゐてくれたる顔の道をしへ
(寝屋川市) 今西 富幸
AIに掻けぬ汗して働けり
(さいたま市) 齋藤 紀子
とり返したきは子育て鳥の子
(大津市) 山中 昌子

【評】一句目。黄河の流れと天の川。天と地との悠久の時間を捉えて壮大。二句目。カムチャツカ半島辺の地震で津波警報、すわ避難。三句目。夏休み中も勉学に励むが、ちょっとは楽しさ。四句目。「枯」衰」とならぬよう頑張てほしい。

短歌時評 「戦後」を捉えなおす

山崎 聡子

塚本邦雄の没後二十年の今年、特集企画が断続的に掲載されている。なかでも目立つのは、塚本の短歌を通して「戦後」を捉えなおす、若い世代の視点だ。はつたつのゆふふひたひを光らせて保険屋が遠き死を売りにくる

有名な『日本人霊歌』の一首。角川短歌五月号では、生駒大祐が「健康的な人間が死を現実的なレベルで意識するのは保険という制度と向き合う時くらい」と現代に即した説みを示した一方、狩峰隆

希は戦争で命を落とすことがなくなった戦後の死に対する価値の転倒と、「死の遠近」を通して時代を照射しようとした塚本の手づきを読み解いている。塚本と同時代である大正生まれの男性約一三四八万人のうち、二〇〇万人が戦死。塚本自身も軍事徴用された兵で広島への原爆投下を遠望している。青春時代を死に限りなく近接した世代にあつて、戦争への憎悪は塚本の終生のモチーフだったが、それはわかりやすい「反戦」の

風信 第1回短歌研究評論賞 短歌研究社主催。平尾勇貴さんの「引用と編集の詩学——ディレクターがあらわれるときに決まった。第42回で終了した現代短歌評論賞に代わる新賞。

◇朝日歌壇 入選取り消し 7月20日付の歌壇に掲載した「塚本も驚くかなれ停車場は人ごみの中異国語の渦」は、類似した先行歌がありましたので、入選を取り消します。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週2回5日までの)。QRコードから